

演說部報

公開豫餞演說會

三年の間、侃諤の辯、縦横の論、以て我が龍南の論壇に高嘯せる人々の將に去らんとするに際し、五月廿日、公開演說會を開催し、陽關の一曲、都門の一枝に代へて、以て餞せり。

△發芽の地。 井手 實雄君(一、一、西)

西洋崇拜の事實に論を起し覺醒を促し、世界中心の移動を歴史的に觀察し、今は即ち大西洋中心時代なりといひ、泰西文明没落の事實に就き、數人名士の言を舉げ或は西洋文明の缺陷を陳べ、その文明を事實に例へて爛熟せりと極論し、大西洋中心時代の去るに止めて、日本現状の觀察に入り、日本の偉大なる所以を説いて、爛熟して落下したる事實の再び發芽す可き地は、精神物質兩文明を吸収同化せる我帝國なりと斷定し、太平洋を擁して世界の覇たらん

爲、國民協同一致の奮勵努力を要求す。

△都會と田舎。 堤 正夫君(一、二、甲二)

都會とは？田舎とは？都會に於る風紀世態の軟化墮落を痛罵し、田園の淳朴なる美風を謳歌し、人類進歩の見地より、都市の精神的田園化を理想とし、數個の晤趣ある實例を引く。

△現代思潮と吾人 弘中 政男君(一、二、乙)

文明は東方より、といふ。ギリシヤは東方思潮の流れを汲み、これを潤化してローマに傳ふ。ローマの末葉より基督教全盛を極めしも、近世に至り遂に墮落するに至れり。自然に歸れ、のルソーの叫びは、實に近代思潮の曙光なりき。更に科學萬能論は道德宗教の權威を失墜せしめ、新なる權威樹立の責任を負へるも、しかも科學また萬能ならず。茲に自由平等と科學とに憑りて遂に窮せる世紀末の思想は、ペルブソン、オイケン等によりて靈的方面に光明を認め、更に靈肉合致の説を生みたり。東洋にも世紀末の行詰れる思想末流を汲んで中毒したる國民あり。肉にのみ馳せんとする近代人は、眞摯、靈的研究を遂げて、徹底せる新思潮を建設し大國民の立脚地を

明にせざる可らず。

△先づ帝國の核心を確立せよ

御厨 信市君(一、三、丙)

海月の如く豆腐の如き現代の似而非文明を呪咀す吾人は西洋文明の模倣にのみこれ努むるに先ち、帝國の核心を確立せざる可らず。核心とは何ぞ。芙蓉國の精髓、古神道の大精神を措きて他なし。本を忘れて末のみに走らんとする人よ。省察、帝國の根抵に思ひ至れ。

△聞け田吾作の銅鑼聲を。

伊藤 兆司君(二、三、乙)

建設の道程を経來れる帝國は、今や多種多様なる改善の域に到達せり。特にこの未曾有の歐亂は、吾人に大なる覺醒を與ふ。曰く、一、民族的に結束せる國家及萬物に超越せる力に對する覺醒。二、科學振興の急務。三、殖民及移民事業發達の急務。要は大和民族の發展あるのみ。自滅か發展か、吾人はこの一つを選ばざる可らず。

△去るに際して。 階川 良一君(一、三、丙)

建部博士の説によれば、世界現在人口十七億五千

萬より、世界の收容し得可き極度の人口即ち百億に達するには僅々七十年の日子のみ。かくて世界は絶對國際競争の時代に入るを以て、その時存する強國五ヶ國とすれば、帝國は世界人口五分の一の人口及版圖を有せざる可らず、となり。然りとせば我が今日依る所は只これを國家に求めざる可らず。而してこれが中心を皇室に仰ぎ、皇室中心の帝國主義を確立せざる可らず。ノラは云へり、妾は妻たり母たる前に先づ人間たらざる可らず、吾人は又、日本人たるものは政治家たり實業家たり教育家たり、宗教家たる前に先づ日本人たらざる可らず、と叫ぶ。何時如何なる處にあり如何なる事に處するも日本人たるの自覺を忘る可らず。日本我の表現人たる事を意識し、一心同體天壤無窮の皇運を扶翼し國家の隆盛を期せざる可らず。

新人生歡迎演說大會

三百の諸君を迎へて、變々たる精彩、更に龍南の天地に横溢す。生命の更新、吾人は新學年といふこの已定のプロセスをも、かくて常に多大の希望を

歡喜を以て迎へざるを得ず。その開會の辭に始ま

△悲壯なる戰。 佐々木高遠君(二、二、丙)

當に千里の鵬程に上らんとする若き鷺が。鋭なり。英なり。

一片の平凡なる感想なりと前提して、先づ樗牛の美的生活論を説き、それが單なる空中樓閣に過ぎずして毫も幸福を齎すものに非ず、且つ吾人眞に全我的に目覺める時、到底かゝる生活に甘せらる可きものならざるを謂ひ、次にツルゲネーアのルージン及びトルストイ後半世の行動を例示して理想を追ふ者の悲壯なる戰を叙し、しかも人間としての意義は、この悲壯なる戰に於てのみ見らる可く、而してその悲壯の蔭にこそ眞の幸福の存在するを高調す。

△國力増進論。 中尾桂一郎君(二、二、丙)

論旨、態度、辯舌と相俟ちて、高邁の氣韻あり。蘇南球磨の急流は突如として激湍となり、忽如として濤々。又ユーモアに富む。

先づ世界の大勢を説き次に日本の内情に及ぶ。發展策を論じて曰く、當局者は帝國の使命を自

覺す可し、選舉は普通選舉による可也、教育を

革新し學問を打破す可し、年に七八十萬の増加

人口は商工に業を得せしめ更に太平洋沿岸一帯の地に殖民す可し、機會を見ては領土擴張に努む可し、陸海軍は單なる裝飾に非ず、財力を豊富にし軍需品は自給するを要す、國富に應じて軍備又擴張せられざる可らず、惡税を廢して中産階級貧民を庇護す可し、今や米の財力、獨の知力、露の兵力は世界の三大威力たらんとす。吾人はそのいづれにも劣る事なく、國民は一致協力大理想に向つて直進せざる可らず。

△歡迎の辭 宇佐美教授

歡迎は單なる歳々の常套に非ず、傳習を享けて新機に臨むものなり。龍南會各部皆その本領に従ひて諸子を迎ふ、人々使命を自覺して個性を開發す可し。中に於て我が演説部は辯論の人を迎ふ。辯論は最高の藝術なり、否藝術の全部なり。萬有具象悉くこれに辯論の啓示を見る。然る辯論は宇宙の發祥と共に生れ、七十萬年今の瞬間に及ぶ。同好の人、辯論の眞面目奈邊に

あるかを了得せよ。

△彈力の人

森 正雄君(一、二、甲)

措辭研麗。妙手の指端ピアノの鍵盤に躍るが如く、婉轉。

ゴムが如何に抑む付けられても亦弾ね上るは、彈力あるが爲なり。人も社會の強者たるには彈力の人たらざる可らず。病氣の抗毒性、火事の焼け太り皆それ／＼に對する彈力なり。人も同様にあらゆる失敗の壓力に堪へ得る彈力なかる可らず。

△偉大なる暗闇。

井手 實雄君(一、二、丙)

高潮する時、天廳空際を疾る如く、平調にして諄々、しかも厭かしめず。

佛人マズリエール氏の富士讚美の聲より言を起し、富士ナイヤガラの壯麗雄大を讚歎憧憬し、尙ほ二三の例によりて偉大なるものゝ裏面には偉大なる所以ある可きを力説し、現代の浮華輕薄の風潮より遠かり價值ある生活を營めと叫び隱退を論じ、次に生活難の呻吟より高等學校價值論に入り、熊本及五高が偉大なる暗黒たる事

を述べ、新入生諸君先意義を了解し左右の毀譽褒貶自己の短衣破帽に盲人たれ、而して以て現在の一歩一歩に努力せよと結ぶ。

△更に深き一點を加へよ。

林 繁三君(一、二、丙)

毅然たる壇上の偉軀、君が欽仰するロイドジョーの倫敦街頭バルコニー上の獅々吼を偲ばしむ。

偉傑と凡人との差異の點を、ロイドジョー氏の例に見て、徹底的使命の自覺、及その使命遂行の念々の工夫に歸す。進んで家康の緊張力、勝海州の識見自恃、ビスマークの豪勇見識、ピットの熱烈なる愛國心、小村壽太郎の悲壯なる生涯皆これ使命遂行の自覺なる深き一點に存するを述べ、翻て吾人が既に努力せる生活、しかも根抵なき見識なき豪勇なき自己の職責に全我を傾注するなき生活に、此の深き一點を加へ國家に盡せ。と。

四十餘年睡夢中、而今腥眼始朦朧、起向高樓撞曉鐘、不知日已過亭午。——王陽明

△白箭の行衛。

菅 健二郎君(一、三、丙)

君文武兩道の達人、龍南論壇の驍將。莊重の辯、悠然たる態度、充實せる内容、完璧に邇しといふ可し。

意義ある五高生活は意義ある人生その儘なり。

意義ある人生とは内容ある人生なり、人生の内容とは如何、これが判れば吾人の前途には光明満つ。嫋々たる秋風、鬢々たる虫聲、皆青年を緊張せしむるの力なり。澄む碧空の色は青年の心のシンボル、空の如き心と、楓の如き赤き心と以て内容ある人生の戦闘者たれ。ロングツエロの有名なる詩に、「一日白箭響を發して天空に去り行く所を知らず、されど程經て森の木に射込まれたるを見き、唱へられたる歌は地に落つく其の何處に落ちたるを知らず、程經て友の胸深く潜めるを見き」といふあり。予はこの壇上に
秋空に放たれたる白箭として立ちたるなり。

生命は創造なり、創造は表現なり。吾人の生活は不斷の自己創造による自己表現なり。而して辯論は自個總體の白熱的表現たる意見に於て、即ち藝術の至上なるもの。吾人の辯論は單なる口角の遊戲に非

ず、全人格の全的發露なり。この蓑田胸喜君の閉會の辭を以て閉會。

外國語演說會

十月廿二日開催、英語に獨逸語に、各自を

Mother tongue とする者の如き流暢さと、極めて輕妙なる acquire とを以て、全く聽衆を魅了す。兩教師のそれ又興趣津津たるものなりき。

△九州の傳説(英)

一、二甲二 櫻井 完一君

△海の悲劇(英)

一、三、甲一 福田 又一君

△醫學に就きて(獨)

三、三 飯田 操君

△軍國主義一瞥(英)

一、三、甲一 近藤 文雄君

△英詩のライム、リズム、及びレフレイン(英)

ポーター教師

△如何に獨乙語を學ぶか(獨)

グンデルト教師

討論大會

冥想し、思索し、考覈し、研鑽し、尙ほしかも遂にウラーツワースの所謂差別を複雑にする第二義的能力の煩らばしい遊戲に過ぎなくては、星を凝視し

て井に陥れる哲人たるの譏なきを得ぬ。吾人は他の一面に於て常に、現實の、當面の、血あり響ある問題に應涉して、縦横に論議し、明快なる解答を與へ得るの修練を必要とする。

十一月十日、討論會開催、論題、大陸乎太平洋乎。

日支日露の協約成り、滿蒙に於る我勢力漸く重きをなす。廣漠たる西伯利亞草原は無限の富を藏して我資本の開發を待てりといふ、帝國々勢の振張はこの大陸に於る發展に憑る可きか。南徼獨領諸島に日章旗翻り、我が濠印貿易は歐亂の爲未曾有の盛況を呈せりと、帝國々威の宣揚はこの大洋の活躍に俟つ可きか。論者は熱心以て抱攘を傾倒せよ、聽者は眞摯以て批判の態度を持せよ。と開會宣せられて、

〔陸〕木村二磨君(一、一、甲) 短軀渾身これ膽の氣慨を以て、劈頭大陸派の爲に侃々の論をなす。

日本現在の財政状態は樂觀する能はず。帝國焦眉の急は富の蓄積なり、帝國の發展は即ち財政的發展を意味す。將來大洋に發展するの要はこれ有り、故に海軍力充實の爲先づ最も容易に富を獲得し得る大陸に向はざる可らず。

〔洋〕三村武俊君(一、一、甲) 熱烈舌端火を發して痛快に大洋派の先驅をなす。

吾人は宇宙の大則に従ひて大洋論を主張す。抑天下を制するには、大陸を制するか、大洋を制するか、はた空中を制するかによらざる可らず、將來は空中を征服するもの天下に覇を唱ふるに至らん。惟ふに廿世紀は大洋を制して天下に號令する最後の時代か。而してこの最後の舞臺に活躍するものは誰ぞ。我帝國の他なきなり。

〔陸〕荒卷練太郎君(一、二、丙) 沈痛の言辭、寸鐵よく敵手を刺すの慨あり。漸くにして反對派勢に乗ず。我が勢力範圍たる滿州に殖民し、又これに財源を求め、且つは以て露の南下を防ぎ。支那の保全に資し、帝國の地位を永遠に安泰たらしめ、その使命を遂行す可し。眩惑的な新領土の獲得や、淺薄な富國策や、これ吾人の採らざる處、これ吾人の大洋主義に左袒し得ざる所以なり。時勢に見、可能性に見て、滿州發展策を以て、帝國存立の大本なりと斷ず。

〔洋〕渡邊潮君(一、二、丙) 流麗暢達の辯、しかも如

何せん敵黨の攻撃益々猛烈となる。

我が大洋發展を極論する所以は、時期と場所と殖民の目的の眞意とを得たるを以てなり。南洋土人の我に好感情を有する事、又國內に南洋熱の高潮せる以て利す可し。殖民は以て第二の帝國を建設す可し、國民精神を忘却せざらんが爲、地味温熱の本國に類し、而も無限の寶藏たる地にこれを求めざる可らず。この點に於て南洋は大陸に優る事數等、祖國を忘れずして殖民地に永住せんには南洋を措きて他なし。

〔陸〕山形教授、諧謔、揶揄一番、

陸の洋より緊急なる、一部生にとりて他學科より英語のより緊要なるが如し。即ち先づ大陸に向つて活躍す可きなり。

〔洋〕中尾桂一郎君(一、二、丙) 洋派勢ひ非なるの時頽勢を挽回して自派に千鈞の重きを加ふ。勇勁敢爲の將。

寒帯の瘠地に漠大の黄金を投ずるは愚なり。産業の發達條件を知れりや。大洋諸地方か悉く輸出超過、大陸諸地が皆輸入超過たるは何故ぞ。

企業に大陸の最高五割と大洋の最高三十割とを

同日の談とするか。日本勞働者は果して支那苦力と競争し得可きや否や。露と争ふには百三十萬の精兵五十億の戦費を要す。支那は支那としてその保全を期するは外交の根本方針、我貿易最大顧客、防禦地帯として侵略し分割す可きに非ず。かくて尙ほ大陸に向はんとするか。帝國の急務は財力の充實なり、吾人は財的價值絶大の太平洋諸地に進まざる可らず。

〔陸〕西川教授 音吐朗々堂を壓し、論理整然反對派又言無し。

發展や活動や、これを武力に俟たんとする時、吾人は餘りに高價を拂はざる可らず。即ち平和的經濟力に憑らざるを得ず。而してその經濟力は之を何處に用ふ可きか、禹域四萬方哩、その天産蓋し無盡藏なり。夏國はこれ吾人雄飛の天地。

〔陸〕堤正元君(一、三、甲) 詢々説きてよく喧嘩の中を切り抜く、また巧なり。

發展には經濟的領土的二様の意義あり。領土住

民天産、亞細亞大陸の太平洋に優るや論なし、即ち經濟的に先づ大陸を採らざる可らず。散在せる國家は權威ある國家たる能はず。大洋は領土的に全く無價値なり。即ち領土的にも全然大陸を以て可となさざる可らざるなり。

〔洋〕森正雄君（一、二、甲）論じ來り、論じ去る、語勢語法、彼我を擧げて全くチャームし了す。

大陸重要ならざるに非ず、しかも大洋に利權を獲得するは更に重要なり。爾今列國大戰に忙はしく、太平洋を顧るの暇無し。今にして太平洋に勢力を確立せば日本國土の狭少を補ひて、列國に對峙し得可く、戦後に來る可き第二の黃禍にも平然拮抗し得可く、かくて太平洋より米國勢力を驅逐せば、帝國の雄飛刮目して待つを得べし。

〔陸〕弘中政男君（一、三、乙）我が論壇一方の雄、透徹せる音聲と、老練なる句調を以て、全く敵黨を威伏す。

白人の黃人壓迫に對抗して、黃色人種の牛耳を把り白人閥を打破せんを以て、大陸的に

確乎たる根柢を築かんとす。吾帝國に最も缺如せるは領土にして、しかも南洋兩米共に他の利權の下にありて如何ともし難し。滿蒙は同胞數萬を犠牲に供せるの地、風土我國人に適し、勢力圏内三萬五千方里、未墾已墾五百萬町歩の耕地ありて、尙ほ五千萬人を收容するの餘祐あり。加ふるに滿州は我攻勢的防禦の最要地域にして支那多事の今日、その領土保全を完くし、實力を以て之に發言權を強要するの地歩を占め置かざる可らず。要するに大陸經營以て、事無ければ經濟的に發展し民族移植に努め、事あれば應急南北に臨まん哉。

〔洋〕小松教授 悠悠々、急かず、迫らず、駁論悉く急所を衝いて、形勢又一轉、海洋派は傾覆の厄を脱かる。

論や盡きたり、しかも更に大陸派の旨を啓かん。見よ支那は遂に我と親交を結ぶ可くも非ず、米大陸濠州又我れを容れず。今日吾人は管太平洋の海上權を握るの外なし。我に財政の餘祐生ず海軍擴張す可し、今日の形勢にて進まば、今後

戦争一年にして我輸出超過は廿億を算せん、八四艦隊に止らず、八八艦隊の數組そも得可し、以て太平洋に艦艦を列ね、制海權を把握せば即ち世界に偉をなす期して待つ可し。

〔陸〕宇佐美教授 論破縦横、喝采裡に討論終結。

獨法二年第二回演說會

大正五年十一月二日午後三時より生徒集會所龍之間にて開催演題次の如し

- 一、佛教徒に對して 渡邊 潮
- 一、煩悶よりのがれて 栗本 雄三
- 一、大食論 村上 則忠
- 一、感想 井川 直行
- 一、獨唱に就いて 濱 健雄
- 一、午睡の價値 小峰 幸申
- 一、棍棒論 高松 直政
- 一、元氣振作論 佐々木 義之
- 一、西洋カブレを排す 匂坂 逸郎
- 一、的をねらつて 三 淵 勝
- 一、不可解 吉田 兼勇
- 一、眞正の成功者 和田 眞臣
- 一、集會所哲學 武藤 信一郎

- 一、閩族打破 中尾 柱一 郎
- 一、憤慨と憤慨 山崎 景介
- 一、Y 熊谷 岩根
- 一、愛斯の研究 井手 實雄
- 一、龍南氣風刷新策 大石 亨
- 一、思想生活 荒牧 練太郎
- 一、閉會の辭 林 繁雄

劍道部報

○選手の事ごも

剛毅朴訥宗の本山として眞摯なる研學の美風は元氣猛烈なる思想の迸出と相まちて龍田山麓白川の邊に龍南城を建設して以來既に二十有六年、烏免勿々々イムの流は滔々として去つて復歸らず、吾人定住の地球年々歳々縮小して止まず、龍南亦幾度か變遷して噴火當時の獅子吼今や將に凡化せられんとす、盍現代教育の鑄型主義の罪たらずんばあらず。平凡に苦しむこと癡の如く、單調を欲せざること糞尿の如き吾等青年又何處にか永遠の生命を發見し得べき。思想の停滞言論の卑屈運動の衰微冬眠を急ぐ秋野然

たるは之れ果して泰平の象か。嗚呼教師の口吻其儘のノートを至上の聖典と仰ぎ、靴紐結ぶの暇さへ節約せんとする人間いかにして人格の向上思想身体の鍛練の余裕あるべきや。赤○の有無を以て人生を評價し實利是れを趁ひ虚名是れを求む。九州男子の粹を集めたる龍南城もいたづらに先輩を泣かしむるのみにして時代風潮に崩壊せずんば幸なり。さればいたづらに慷慨するを止めよ。暮爾たる人間の子何ぞ逡巡乎としてうめかんや。唯自己方寸裡別天地を造り旗幟鮮明偽らざる自己發揮をなすに如かじ。この冬の野の如き龍南にも誇るべきものなきにしあらず。我劍道部即ち其れか。凡そ人生は奮闘の歴史なり文明の奔流遡る所開化の黒潮岩を噛む處、遂に血と劍とを見ざるなく、劍は將に男子の表象たらずんばあらず。我龍南古來劍客多し。血と肉との結晶たる優勝旗は龍南八百の健兒の代表者にして選手に向ひ責任の重大を訓し龍南生殺の權一にかゝりて其隻肩にあるを覺わしむ。洛陽の天地に於て劍と楯とを翳し碧血を流して得たる此優勝旗のひらめく時勇士の心無限の男姓美を味ふ可し勝に酔ふことを止めよ、去年

の勝利は本年の勝利にあらず。今や季寒うして樹々の凋落し始め、今や戰機徐徐に熟して濟美館裡劍戟の響いよ／＼凄く戰士の鐵腕日夜に鳴つて精氣一團の火となり遠く洛陽をやかんとする目的は唯崖殺の二字か、去年の老將佐々木、石坂、曾布川、武藤帝大に去つて光永、村田、尾上、古閑、大石の諸士新に入る、即ち愛甲、杉村、上村、池部、梅田、西、岡村と與に合宿して或は濟々疊と或は熊中、師範等と試合をつとめて豫め龍南八百の健兒を辱かしめざらんことを期す。尾上は當部の少年たり愛甲系の人か村田は阿蘇の産、君が劍は火山の爆發に似て人心ために動くの概あり古閑、亦村田とならび劍影孳猛、加ふるに頑丈なる體軀はいさゝか當部の氣を強うするに足る愛甲は當部の花たるべく劍影の電光石火は其の人間たるかを疑はしむ、去年の戰に殊功ありたるは宜へなり杉村又愛甲と並稱すべき人にして小手の名手として既に定評あり

植村は愛甲、杉村、梅田と共に中堅たる可く元氣旺盛劍尖鋭く俱に洛陽の天地に雄名を輝したる人なり梅田は天草の産天洋と號すと聞く一進一退寄せては

返す狂瀾と打込む劍は悠々迫らず正に天洋の號に負
 かす光永、池部の二氏當部の快男子たるべく劍鋒ま
 た茫茫たり、池部の亂擊猛烈を極むる時到底當る可
 からざる慨あり、大石の前身は士官學校にて獅子吼
 成らざるに辭して武夫原に遊ぶ身となる元氣猛烈劍
 鋒亦亂射たるは君の性質の表象たらずんばあらず西
 又よく亂擊流を汲む、大狼の如き元氣横溢して劍と
 なり劍前人なく前劍背人なきの慨あり、御大將岡村
 の堂々たる体軀は大石と俱に當部の看板にて唯劍の
 みならず柔道をよくす、迫らず急かす相手を呑むの
 勇ありて當部の好將軍たるを失はず、選手を率ゐて
 遠く洛陽の天地に會戦するの機熟すると俱に君が心
 中萬感交々至るをおしはかるだに男々し (大石)

◎新人生歡迎會兼秋季大會

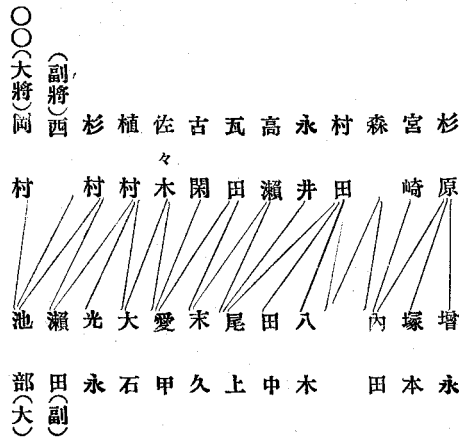
(十月七日)

士氣壤頽道義地を拂ふと歎くを止めよ。我に今、
 新進氣銳の三百の勇士來れり。我部は茲に紅白試
 合を催ほし其等の新將と共に丁々曳應の裡一劍相
 報いて以て歡迎の情を表せんとはするものなり是

れ余輩が敬愛する新進の闘士に對する禮にあらざ
 るなきか。感激の兒が憧憬措からざる濟美館裡優
 勝の旗を飾らんとする時紫影既に搖々たりき。午
 後一時。鶴田師範の審判の許に開かれたる勝負は
 左の如し。

紅(勝)

(白)



◎大日本武徳會行

第十七回青年武徳大會は京都武徳會本部に於て八

月五六七日開かれたり、本校出演者成績左の如し

×○○(西)堀切源 隆(五高) 一(京都川端署)

西は今日こそ天晴れ手柄せんと元氣満々たる龍南の將、彼方は悠々として先生振りたる態度早まらず追らずいざや來れと待ち受くるを西氏肉薄飛撃其奥妙の技を盡せしも武運つたなく勝負は他日に期して東西に分る。

×○○(神)岡村 勝 吉(武專五級上) 二(五高)

神尾氏は位五級の上を有し武術専門學校中興の太刀の早業なるにつけては彼の右に出するものなし、實に前日の切取り勝負にては十三人を抜いで見事の一等賞を得たる剛の者。岡村強敵來れど切齒扼腕、見事神尾の面を取りしも敵もさるもの續いて小手を打ち、一本一本の勝負となるや、審判氣をきかし勝敗を他日に期せしむ。

◎熊本學生講武會

十月十七日熊本中學校道場にて開かれたり、本校選手の成績左の如し

當日藥專は試験の都合上出席なし

○吉田 正幸(一師) 坂本 經亮(一師)
光永末五郎(五高) 杉村 孝輔(五高)

○○楠田 谷介(熊中) 川口 十義(一師)
○○池部 龍生(五高) 岡村 贊二(五高)

柔道部 報

京都遠征選手確定

突如として來りし舊京都帝國大學第二回高等學校柔道大會の飛報は是れ吾部の忘るる能はざる怨恨に終りぬ。汚れなきも誇とせし我部の歴史に印せしこの敗戦の跡、吾人は感傷的なる辭を以て過去のペーシを抹し去る無責任漢にあらず。今猶涙乾かずして或物の常に胸中に徘徊して止まざるを覺ゆるなり新しき第三回の挑戦狀は來りぬ。我はそも之に對し如何なる用意と確信とを存するか。問ふを込めよ吾人は臥薪嘗膽或は寒稽古或は暑稽古に、東京に、福岡に或は京都に至り營々として之が策を講し新學年を迎へては月曜を除きて日曜を問はず只粉骨碎身之が復讐に當らんとせるなり。過去の用意なき戦、不幸多事の際の戦——人もし昨年の戦を問はば是れ當部に於ける同大會の小手調なりと答へん。かの暴舉

力を自覺した。吾等は吾等の欠點を知得し同時に

他校の特長をも併せ知り。是に於てか吾等は選手

を確定し以て只努むべきを努め爲すべきをなしたる

あとの成敗を俟たんとす。勝敗は時の運なり。吾等

は只この一事を努むの精神を以て來るべき十二月二

十七日以降の勝負を決せんとす。偏に熱烈なる諸兄

の應援と奨勵とを乞うて止まざるものなり

選手人名左の如し

二段	二、三、甲	有田篤太郎	二段	一、三、丙	菅 健次郎
初段	一、三、甲	田中 敏三	段外一級	一、三、乙	廣辻 信吉
全	一、三、甲	松井小太郎	全	一、三、丙	吉岡 三郎
全	二、三、甲	小本 江笠	全	三、三、	橋村 論二
全	一、二、乙	山田 勝清	全	全	中山 節郎
全	一、二、丙	佐々木義之	全	全	山崎 景介
全	二、二、丙	徳重 英介	全	三、三、	古城 東二
二段	一、一、丙	田中貞三郎	段外一級	一、一、乙	龜谷 軍平
全	二、一、丙	朝川 誠	全	全	佐々木榮徳

因云、菅初段は進歩の跡著しき故を以て十月十三日付を以て講道館より二段に昇段せられたり。

(十二月三日 鐵鉛記)

水泳部報

數年來我部の師範として御盡力下さつた清水師範が突然試験間際になつて御病氣の爲今度御出での出来ない旨通知があつたが。多くの水泳教師は己に各方面の招聘に應じ居り、從來五高水泳部は、小堀流の師範が來會せられて居たのであるが、止むを得ず山ノ内流の師範、甲斐彦四郎氏に御苦勞を願ふ事となつた。

師範の事で大分血迷つた本年の水泳部は、己に定つて居た、合宿所なる、金波樓を、熊本幼年校生徒に占領せられたが、幸にも佐藤氏の御盡力に依つて城内二ノ門石河氏宅を借りて自炊生活を愉快に一ヶ月間送る事を得たのは、誠に同氏に謝する處大である。師範も己に來會を承諾し、會場も己に確定した。而かも雨天は十日を相前後して容赦なく續く。準備は困難を極め、部員は來會を見合はせると云ふ有様であつた。

七月十日、雨、一時曇(開會)

氣早の連中は雨降りでも内に居る事が出来ず、もう舟を乗り廻して居た。しかし勿論一般の練習は出来ず。一同皆明日の晴天を祈りつゝ本年度水泳部の除幕式は執行され了つた。

七月十一日、雨、後曇、

時を失した五月雨は、思ひ出した様に今となつて降り續く。午後多少模様を變じて来たから師範と共に五六人の生徒は水着姿勇ましく出かけた。連雨の爲唐津灣は見渡す限り濁流氾濫し、黄橙色を呈して居るので形等は見えず、師範は唯舟の上で棹の持方泳の形等を示された。三時頃一哩を隔つる鳥島に舟を進め、上陸して各々鶴城城下の風光を愛でて寮歌を怒鳴つた。

七月十二日 雷雨後曇。

午前五時頃宿の奥さんが。水泳部の舟が流れてると云つて来た。濱の方に飛んで行つて見ると舟は随分沖に流されてゐる。大雷雨の中を先生と蓮尾君とは勇ましく混濁の浪をかき分けて突進した。

十時頃布上君は所用の爲め一時歸省する事となつた雨天の爲めに練習出来ず夕食後一同海濱に出て角力

を取り部歌を歌ひ又明日の天気について色々評議した。

七月十三日 雨、後晴（飛臺組立）

午後に至つて天候漸く回復。飛臺成る。

先頭第一に攀ち上つて、萬歳と叫んだのは一部二年の石井龍猪君であつた。先生からは楷段法の立泳ぎ及竿を持つた時の泳ぎ方を習つたが中々出来ぬ。夜は茶話會を開き名物の松露饅頭と蓮尾君のお宅から送られた見事な桃とで愉快に一日の勞を慰した。

七月十四日 晴（濱崎見物）

舟で鳥島まで行つて練習したがまた海の濁は去らず練習には不適當である。

午後又鳥島に行つて貝拾ひをする。

小川君と武富君とが午後來會したので楷上頓に賑かさを増した。夕食後部員は一同相携へて濱崎祇園見物に出かけた。道は虹の松原を縫つて居る。二里の緑門を潜り抜けると直ぐ濱崎町になつて居た。参拜後美しく飾られた三屋臺を見物し、計らずも途中で逢つた一部三年の井上武君の宅で一同御馳走になり又以前水泳部の委員だつた青木一郎氏の切なる御誘

王師の常吉剛太君の御配慮に依り、砲臺の壯觀を見物する事が出来て部員一同の喜は非常に大であつた。青木氏始め井上君、常吉君に厚く御禮を申し上げる。

七月十七日 晴、一時曇（松浦川月見）

昨日渡邊勳君を本日又御愛嬌ある田中君を加へた我部は一層陽氣になつて來た。練習は例の如く皆の技術は大分進歩したが又雨に妨げられて中止。夜七時半から小舟で松浦川に月見。部歌寮歌は交々高唱され。師範の好意で餽パンの舌鼓。蓮尾君の詩吟は蓋天下一品。

七月十八日 雨、後曇

九時に一度海岸に行つたが降雨の爲に中止。十二時近くまで太雷雨。來會者。中原君、牧川君。

七月十九日 晴

午後先輩古川君が來會し、一同と共に鳥島まで行き其美事な泳を拜見した。

七月二十一日 曇一時雨（鳥島遠泳）

昨日大野、高松三淵の三君を向へ又今日原田橋村木

午後三哩の遠泳をやつた途に中風變向し風となり、剩へ大雷雨來襲し川上、堤、蓮尾、渡邊、中原五君の成功者を出すに過ぎなかつたのは遺憾であつた。夜は師範の歓迎會を催し歡樂の歌響き成功の色階上に溢れた。

七月二十二日 晴一時雨（水書）

午後水書板を持つて行き各自稽古、就中原君の技倆最も鮮か。木塚君が太く濃く頭張つたのは痛快であつた。降雨の爲め中止。

七月二十三日 雨一時晴

菅野君來り。中原君去る。

七月二十五日 晴

いよ／＼本統の日和になつたので随分暑い。飛臺だけ出して稽古。小川君が中段からの滑込みは思ひ切つたものだ。中々よくやる。來會者、原君。

七月二十六、七日 曇（強風）

午後濱傳ひに西唐津に行き大島に渡つた。濱で子供が貝を堀る様に何か堀つてゐる。尋ねると鐵片を堀つて居る。一斤五厘に賣れると云ふ。歐洲の戦亂又

影響す。

七月二十八日 晴（鏡山登山）

尙風が強い爲今日は第一回登山會を試みた。參會者十數名。昔佐用姫が夫佐手彦を狂せん許りに袖振り招いたてふ鏡山（一名緒振山又八面山）は荒武者男の杉下駄に掛くるには餘り可愛相な程艶麗で優雅な風情を示して居る。頂上には一寸廣い堤がある。一行は北側の佐用姫手掛の松の所に行つて渺々たる玄海灘、點々所在の大島小島、波打ち寄する海濱院、さては長蛇の松浦橋の絶景を暫く無言の儘見惚れた。

七月二十九日 晴（高島遠泳）

吾人のシンボルは正義の御旗、護國の柏葉旗は高く掲げられ、氣持よげに朝風に揺れてゐる。一同舟に乗つて三漕を隔つる高島に至り、十時四分先頭は鶴城を目標に進んだ。劇浪を乗り切り船上よりの應援に勵まされ先頭は十一時三十三分に着陸、先頭着陸を認めた残りの連中は愈々頑張の本性を現はして潮を呑む事幾度に及ぶも更に屈する景色はない。就

中水川九七郎の頑張は蓋頭張の最大なるものであ

つた、が如何せん僅かに餘す二三町の所で痙攣を起した爲中止するの止むなきに至つたのは返す々々も遺憾の至りである。最後まで十一時四十八分には着陸した。

成功者氏名は次の通り。

田中吉郎君、蓮尾秀君、原實君、三淵勝君、武富昇君、橋村謙二君、渡邊勤君、堤正元君。

八月二日 晴一時雷雨

練習の最終日とて皆の練習は實に素晴しきもの。飛臺ももう今日限りとて引き出して。入れ變り立ち變り飛び込む其壯觀。來會者ならぬ者の容易に想像出來ぬ所である。

八月三日 晴（名護屋見物）

蓮尾君の御尊父の一方ならぬ御配慮に依つて、吾々の爲特に三菱のランチを今日一日見物の爲に無料で出港させて頂く事が出來たのは誠に深く厚く御禮申し上げねばならぬ。

九時十分西唐津港を發して名護屋城趾訪問に出掛けた、他人入らざる痛快兒のみで満載されたランチは談笑嬉々の裡に七ツ谷を訪れ同様に柱狀節理の續き

なる目録若し至り、鳥嶋子の燈台を遙か右に鷹島の燈台に向ひつゝ進み十一時、音に聞く名護屋港に着いた。港より城まで上り十四五町。城趾宏大。城の館はないが築石古りて苔青く懐古の情漫に深い。遠望絶佳。一時爰を去り玉島神社を呼子港に參拜す。當社神主が一部三年の吉田正元君の御親族とやらで特に優遇を受け、佐用姫の化石を見た。二時頃ランチに歸つたが一日水に入らないでも乾死ぬる河童連特に透明な呼子港を見ては。我故郷の戀しさに終に禁じ得ずして暫くは御里歸へり。寮歌と部歌との聲勇ましく歸宿したは正に四時。寸暇を利用し飯まで泳ぐ部員の熱心さ感服の外なし。

八月四日 晴（十哩遠泳）

赤く染め抜いた我柏葉旗は橄欖の香芳ばしく何時になく活氣立つて見える。宜なる哉今日こそは渾身の血を躍らした十哩遠泳は舉行されるのである。五時半己に一同は起床した。各々の赤銅面には意味あり氣な快心の笑は漂つてゐた。

絶好の遠泳日和。七時二十分蓮尾卓君を先頭に鳥島を目標に出發した後は堤正元君で同四十三分であつ

た。先頭は同五十五分第三浮標を右廻り堂突支唐を目標に取り約二哩三分を進み更に八時三十分方向を北に轉じ大島に向つた鐵腕に水を切り二哩、三哩、四哩と突進に突進を重ねるも何等の疲勞も見せず、一人の落伍者もなかつた。赫灼たる八月の太陽は容赦もなくザリ／＼と照りつける。正九時大島の東端から高島の左端に向ひ十時十五分高島の東端を過ぎ濱崎に向つた、頃から北風が多少出た爲波も起り水温も下つて來た。十時四十二分芥屋の大門と高島との間に姫島を望む地點から海濱院に方向を轉じ、十一時五分更に舞鶴公園に目標を轉じた。此の時水温は大いに下り、逆風となり其の上に太陽の熱度はイヤと云ふ程増して來て一同の困難は一方ならぬ。隊伍も稍々壞れ落伍者も多少出來た。十一時十九分左廻りに大圓を書きつゝ大島右端に向つたが松浦川の汎流は當日遠泳中最も吾々を苦しめた。十二時五分第二浮標を廻り亂れた隊を元の二列縦隊に整へ第一浮標に行つた時一齊に行列横隊となり曳々の聲天地を衝きつゝ堂々海濱院下に歸着し名譽ある十哩遠泳を終つたのは正に十二時二十五分であつた。

遊泳時間、五時間を過ぐる事實に五分。濱には歡樂の歌響き沖には鷗が飛んで居た。成功者次の如し。
 林勝三君、田中吉郎君、三淵勝君、蓮尾秀君、武富昇君、小川九七郎君、川上滿義君、副島廉治君、渡邊勤君、堤正元君。

午後は練習隨意、多くは午睡す。

八月五日 晴 (庭球大會解散會)

終に我部最後の日は來た。愉快に有意義に暮し得た吾人は親睦に慰勞の意を兼ねて午前は唐中の庭を貸りて庭球大會を開いた。歸宿すれば又又蓮尾君の御宅から大西瓜數々を送られ一同輪を爲して快談。午後練習隨意。

夜に入つて盛大なる解散會を催した。當夜佐藤氏、古川氏も見ね、一同の餘興、昨日の苦心成功談、今日の庭球の敗北談、親和の氣は滿堂に溢れて時の過ぐるのを知らなかつた。殊に佐藤氏が佐用姫の物語は吾人の歴史興味を大いに湧かした。尙當夜古川氏より一同に菓子を送られた事を多謝する。

昨日の遠泳の結果部員進級氏名次の如し

初段 古川俊勝

一級 林勝三、田中吉郎、川上滿義、堤正元

二級 蓮尾卓、中原英、原實

三級 三淵勝、蓮尾秀、武富昇、渡邊勤、小川九七郎、木塚新、石井龍猪

四級 小野哲一、常吉剛太、橋村謙二、伊藤壽力、古川尙、井上武平川友敬

五級 布上正則、莊島秩男、吉田正元、竹林平一郎、牧川鷹之助、菅野寛一、高松亭、大野重藏、馬場義雄、山崎景介、永田計介、中島榮藏、池田鹿一。

級外 餘白無二付略ス。

助手 古賀收藏氏、古川俊勝氏、副島廉治氏、岡本糺氏

尚本年の水泳部々歌左の如し

●水泳部之歌(大正五年)

二調	3. 2	1. 2	3. 5	5	2. 2	2. 3	2. 0
	カ	シ	カ	ハ	カ	セ	カ
	3. 4	5. 5	1. 2	3. 1	6. 6	5. 5	3. 0
	シ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
	1. 2	3. 3	2. 1	2. 5	6. 6	3. 6	5. 0
	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ

1.	1	6	5	1.	2	3	3.	4	3.	2	5.	0
ク	ソ	ズ	△	△	キ	ノ	チ	ル	カ	ナ		
6.	7	i.	i.	6.	6	5	1.	2	3.	3	2.	0
ク	ニ	カ	ク	シ	ク	ノ	ソ	ツ	ツ	ツ	キ	
1.	2	3.	3	5.	5	3	1.	3.	2	1	1.	0
ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	キ	ニ	ズ	ツ	ヒ	キ	ツ	一

一、 柏の旗に風捲れて
荒海の邊に集し

げに赫灼の烈日も
立田の山の南や

鬱勃の氣を示すべく
我今立てり支海の

三、 神秘ぞこもる水底や
赫耀ふ珠を搜るべく

我今泳ぐ大海の
此の西海の別天地

四、 五尺の身をば横ふる
朝豪宕の波の曲

五、 あはれ皆人稱へずや
鏡の山の覺むる時

湖の唸りの音高く
健兒が胸の躍るがな

我等が意氣に退避きつ
聖き學舎に漲れる

夏炎陽の日を浴びて
汐げの煙立つところ

龍の御神の腰なる
ひれ振りて行く魚のごま

五百重の涙の湧く所
浮世の塵をよそにして

枕に響く天然の
夜は纖麗の松の歌

虹の松原音たまて
切りはなれし夜の暮の

勝利の色に敏獲の
六、 ああ一日の活動を
天つ御空の色映はし

いざや我友諸共に

我等が徽草水さ照るを
休めて眺むる夕暮の
海に無限の力有り

天地の大を謳はすや

(ナリ)

三角遠航記

河岸の稻穂が色づき初めて大阿蘇の影が紫に澄む十月の十四日大正五年度三角遠航を企てたのであつた一時半の豫定が稍遅れ二時四十分筑紫支海阿蘇の三艇は静かに江津の水面に降りた總勢すべて二十二人何れも若々しい血に燃えて居る猛者揃ひである天は高く水は遙かにポートは夢の様に流れて行く川橋、村、頬被りの百姓や物珍らしげな小供等に迎送されつゝ三艇は次第に緑川を下る四邊はすべてが静かである、萬有は穩やかな零圍氣に包まれて身も心も船もオールも渾然として一つの樂調となる、聞ゆるものは水の音、目に入るものは兩岸の秋色、唯健兒の高唱のみが静寂を破つて耳に響く二里餘りも漕ぎ下つた頃一つの急湍に出遭つた船は

ぐつとあほられて又静かな清流に流れ入る河尻の鐵橋が見へ初めた頃は夕焼が何時ともなく淋れて何か怪しげな里雲が頻りに群り湧いて居た、我等は一先づボートを鐵橋の側に繋いで若松屋で夕食を認め來る可き今夜の活躍に備へた

五時すぎ我等は再水上の人となつて海へ海へと急いだのであつた。川幅が俄に廣くなり堤防の陰に帆柱が見え出した頃あたりは全く夕闇の中に圍まれてしまつた夕焼の名残もなく十八夜の月も未だ出ない。相互の連絡を失はぬ様にと用意の航海ランプにも火を入れたが一しきりバツと輝いてすぐに消わかけてしまふ、仕方がないので川口で上陸して油を買ひ求める。はるか前は海である、三角迄未だ七里の航程黙々たる水上に一しきり風がそよいで來る我等は蘇つたランプの光りに力を得て長い堤防の狹間をぬけ渺茫たる有明海の波濤に乗り出でた

時しも日はトツブリと暮れ果て、波は稍高く風はさしてひどくもない。今迄閃めいて居た星も全く雲に閉されて唯黒暗暗の中に波がゆたり／＼とうねつて居る、三艇は舳を揃へて暮らに進むしばらくして月

が出た、物凄しい黒雲を白銀色に彩どつて蒼白い光りを見るからに寒い。ザブン：ザブンと横様に舳をたたく波の音かすかに瞬く海岸の一つ灯、何やら言ひ知れぬ暗示を與へて居る風はまして浪も高い、剩りボツリボツリと零が落ちて來た僚艇の影はかすかに黒くランプの明りだけが青蛇の眼の様に光つて居る。あほりを喰つた船がさつと傾げば波は肩から一面に浴びせかかる、風の怒號、波の奔雷、健兒がオイ一、二の掛聲と混じつて重く又深いアイロニイとなる

『三角は彼處だ、もう一息』力の福音は期せずして各自の胸に響く「後百本、そら漕いだ」勇ましい掛聲の中にオールは眞暗な波を切る。一本二本三本：燈臺の明りが自ら近づいて三角の港は目前に現れた、驚破と一時に湧き立つた歡喜の聲は期せずしてオールの力となる、摺鉢形の島陰の大きな奔流も一氣に乗切て油の様な港の中に漕ぎ入つたのは十二時に間もない時であつた、三角の町は深い沈黙の中に包まれて出迎の提灯のみが殊更に赤い

岩石將軍を載せた僚艇は稍遅れて港に入つた、其の夜は海岸の宇土屋で寝に就く

第二日

眼覺めて見るさ美しい港である屋根の上に夥しく干したシャツ、ツボン、青旗シート等悉く昨夜の名残りならぬはない、道行く人も異様の寝巻姿に驚異の眼を見張りながら通つて行く

正午我等は歸航の途についた

空は全く晴れ水は透き透るばかりに青い港を出ると前に温泉の雄姿が聳り背後に繪の様な三角街道が走つて居る三艘は海岸沿ひに輝やかしい光を浴びて漕いで行く白い艇身、紺青の海、切り立つた岩壁、濃青の山 悉く之一幅の畫圖である、其中に水を搔いてはキラリと光るオールのみが劍の様に閃いて行く此の平和な空氣に包まれて船の中では氣の早い連中の辨當の包が解かれ徳利入の白湯がゴクリ／＼と咽喉を濕して居た然し其も束の間、二時頃から風が出た、空も曇つた雨が降り波が立ち、さつきの海とも思へぬ程に濁つて居る、剩へ潮水でびしょ濡れになつたシャツを風は容赦なく吹き捲くる、流石の猛者も齒の根も合はずオール取る手も震へて居る。川口の堤防がつい間近に見えて來た頃潮はぐつと引

いてしまつた、船脚は座つて押せども漕げどもいづかな動かぬ、止む無く腰から下を海に入つてエツサ／＼と押しに行く。かくてやつとの思ひで川口に着いたのは六時に程近い頃であつた。疲れた腕に馬力をかけものゝ一時間も遡つた時川尻道の里數を聞くぞ「一里半位でせう」と言ふ。此の一言に元氣を得て今一息だと漕き上る

今は船頭の答へる道程の聞く度毎に短くなつて行くのが何よりの樂みである。其れに何ぞや行けども々々里數は少しも減つて來ぬ一里行つてもまだ一里、半里行つても一里と言ふ、而も淺瀬に乗り上げる事水に入つて船を押す事無慮十度所の騒ぎぢやない。兎角する中に眞實の一里半が來てやつと川尻の鰻屋に着く びしょぬれのズボンを絞り湯に入り鰻飯を食てる中に漸く人心地になつて來た

十二時の汽車で皆熊本に歸る

昨夜の月がにこやかにほゝ笑んで熊本町の町が今更に珍らしい風の唸り浪の音未だ耳の邊りにざわついてる様だ、此の間航程實に廿里。彼の物凄く有明海の一夜は永久に健兒が腦裏を去らないであらう(柴迷生記)